

沖藤典子

OKIFUJI NORIKO

転勤族の
妻たち

沖藤典子(おきふじ のりこ)

1938年北海道室蘭市生まれ。1961年北海道大学文学部哲学科心理学教室卒。同年韓国日本リサーチセンター調査研究部入社、調査部第二企画調査室長を経て、1976年退社。

主な著書：

『女が職場を去る日』(新潮社)

『銀の園・ちちははの群像』(新潮社)

『女が会社へ行きたくない朝』(主婦と生活社)

『妻がひそかに決意する時』(祥伝社)

『平安なれ 命の終り』(新潮社)

『女が職場で悩む時』(主婦と生活社)

『働きながら親を見る』(学陽書房)

『女と家族の交叉点』(コンパニオン出版)

『老いを設計する』(亜紀書房)

『愛をさすらう女たち』(潮出版社)

ほか共著多数。

転勤族の妻たち

昭和61年11月1日 第1版第1刷発行

昭和62年2月10日 第1版第4刷発行

検
印
廃
止

著者 沖 藤 典 子

発行者 矢 部 文 治

印刷所 株式会社 太 洋 社

発行所 株式 創 元 社

〔530〕 大阪市北区西天満1丁目4-2

電話・06(363)2531(代)

振替大阪5-57099

東京支店〔162〕 東京都新宿区山吹町77

電話・03(269)1051(代)

落丁・乱丁のときはおとりかえいたします。

©1986 Printed in Japan

LSBN4-1422-32009-2

転勤族の妻たち*目次

第一章 重たき日々の記憶―転勤問題への橋渡しとして―

3

第二章 選択をせまられる妻 41

新婚早々に別居して 42

職業と老親との別れ 57

いつもゼロからやり直し 71

自立を奪われる背景 100

第三章 夫の行くところはどこまでも 111

これもひとつの生き方 112

親孝行をさせてくれる転勤 123

転居後の“居場所”を求めて 133

第四章 華やかな転勤であつたけれど 153

姑から解放されたはずが…… 154

波乱多し、海外駐在員の妻 175

子供の転校・老親をめぐって 207

第五章 自立を捨てなかつた妻 227

別れて暮らす結婚 228

夫が辞めて帰ってくる！ 240

妻の自立を支えるもの 249

終章 転勤——妻の岐路 259

あとがき 276

装丁
杉野諒

転勤族の妻たち

第一章 重たき日々の記憶

— 転勤問題への橋渡しとして —

発車間際に飛び乗った、東京駅発午後五時四十七分のひかり二十六号は、ほぼ満席だった。うかつにもこの時間帯の混雑を予想していなかった。座席指定券を買わなかったことを後悔しながら後ろの方まで歩いて、ようやくのこと空席を一つ見つけた。東京駅に来るまでに相当疲れていたもので、腰をおろすことの出来る場所の発見は、旅路の安らかさを約束してもらったような嬉しさだ。左側二つの座席には女物の旅行バッグが置いてある。

二月半ばの水曜日夜の新幹線乗客は、驚いたことにほとんどがサラリーマンと思われる男たちだった。一日の仕事を終えてから出張の途についたのか、あるいは出張を終えて帰るところなのか、さらには単身赴任者が家族のもとへ急ぐのか、ビール缶を手に隣と喋りあっている男、黙々と弁当をとる者、夕刊や書類に眺め入る者、ゆっくりと動き出した列車の振動にそれぞれの背が微かにゆれている。あまりにも明るく影のない車内で、その灰色軍団とも言うべき背中では、総じて言えば人の形そのものが影であるかのように静かだ。

私は神戸に行こうとしていた。働く女性のための講演を依頼されていたのである。

この種のテーマを引き受けるたびに、いつもたじろぎを覚える。会社を辞めた女だというひけめや後ろめたさと同時に、働き続けている女への申し訳なき、自分自身への口惜しさなどが入り乱れて困惑してしまう。

彼女たちはいったい何を期待して私に講演を依頼してくるのだろう。働き続けることの困難さ、働く女は仕事と家事の二つの荷を背負って、育児と老親看りの二つの壁をよじ登る、この二つの荷と二つの壁の現実について語って欲しいというのか、そして何故私が辞めざるを得なかったか、あるいは辞めたあとどう思っているのか、そのあたりを聞きたいというのだろうか。ためらいつつも引き受けて、そしてそのあと後悔しながら悩むのだ。いつものパターン、儀式のようなものだ。

私はバッグから講演のレジメを引き出してもう一度考え込む。

ひかり号は徐々にスピードをあげながら、とっぷり暮れた都会の喧騒を二つに割ってつき進んでいく。講演内容を考えなくてはと思いつつも、私の目はその夜景に奪われていつて、書類の文字が頭に入らない。窓ガラスに映るサラリーマンたちの横顔が、あるなつかしさをもって私にせまってくる。

会社員だった頃、私も出張が多かった。そして多くの場合利用するのは夜の新幹線であり、夜行列車だった。それがもつとも時間を有効に使えるからだ。山陰地方の出張に、夜行寝台で出かけて朝目的地に着き、一日の仕事を終えて、再び夜行に乗り込み翌朝東京駅から会社に直行する、そんな強行軍をしたこともあった。その時はどうしてこんなにハード・スケジュールで働かねばならないのかと思ったものだが、今にして思えば夢中で働いていたんだなあと、仕事にのめり込んでいた自分をい

おしむ思いが湧いてくる。どんなスケジュールでもこなしてみせるという意気込みが、私を走り廻らせてもいた。

組織の中で有為な人材だと思われたい気持ちも強かった。上司や同僚から、彼女なら少しくらいの難行はやりとげるさ、そう思われることが私の望みでもあった。頭での勝負はちよつと弱いけれど、身体を使うことならまかしといて、そんな思いでもあった。

それは、アメリカの心理学者アブラハム・マズローが唱えた人間の五つの欲求段階における「評価の欲求」に深く根ざしたものであったかもしれない。

彼の言う五つの段階とは、第一に生理的欲求、第二に安全の欲求、第三に所属と愛情の欲求、第四に評価の欲求、第五に自己実現の欲求。人は、より低次の欲求から、高次の欲求に向けて満足を求めていくという。

私はこの四段階めの「評価の欲求」を求めることにあせっていたとも言える。しかし、仕事をやる人間であれば、誰しもがこの評価を求めて働くのではないだろうか。この疾駆する列車に座る男たちも、ある者は疲れた表情を見せ、ある者は意欲を垣間見せながら、自分の価値を上役や同僚に示そうとしている。彼ら一人一人の仕事内容とか、社内の状況は違うだろうが、そして中には妻子を養うためにやむなく働いている者もいるだろうが、しかし仕事はそうした収入を得る手段を越えて、なんらかの人生上の意味を彼らに与えているのではないだろうか。

私も新入社員時代の、さしたる仕事も出来なかった人間から、少しずつ仕事をまかされるようになった

て、仕事を通して生きることが自分の生き方だと言うプロセスを経てきている。働くことは、収入を得る手段であると同時に、それ以上の意味のあることを身体で学んでいったと思う。

私は勤続十五年にして職場を去った。長い勤めの間には辞めたいと思うことはたびたびあったが、しかしその時私は、ようやくのこと仕事を通して生きること喜びを見出すことの出来るようになった頃だったのだ。

「結局のところ、あなたが辞めた理由は何なんですか」こう問われたことも多いが、私には何か一つの理由に絞ることは出来ない。「さあ、何だったんでしょうねえ、私にもよく分からないんですよ」と答えざるを得ないのだ。

過去に対して「もしも」と言うことは意味のないことかもしれないけれど、私はやはり「もしも……」と考え込んでしまう。

「もしも、夫が転勤していなかったら……、そして夫が八年間の単身赴任を受け入れてくれたら、私は辞めなかったでしょう」

「もしも、その転勤先も札幌のように遠くはなくて、行き来がしやすい所だったら、また考え方も変わったかもしれません」

「もしも、同居していた私の父が病気にならなかったら、それも癌^{がん}などという痛みの激しい病気でなかったら……、さらには地域ケアなどの終末看護の体制が整っていれば、私はあんなにつらい思いはしなくてすんだと思います。その心身の疲労や亡くなったあとの後悔の思いがなければ、辞めなかつ

たかもしれせん」

「もしも、私が室長などという中間管理職になっていなかったら、もっと自由に休むことも出来たでしょうし、責任感に苦しむこともなかったと思います。あとになって、仕事も看病も、どっちも思うようでなかったと、悩むこともなかったでしょう」

「もしも、父の死後すぐに長女の高校入試をめぐって、夫の赴任先の高校にするか、このままそれままで住んでいた神奈川県立にするか、その問題が起こらなければ、つまりはもう少し時間の余裕があれば、考え方も変わったかもしれせん」

「もしも、私に兄や姉が、いや弟か妹か、とにかく誰か身近に相談でき、力になってくれる人がいれば、一人で悩まなくてすんだでしょう。そうすれば父親のいない家で、さらには祖父に死なれて淋しがっている二人の娘に対する良い智恵も生まれたかもしれせん」

こうして「もしも」は無限連鎖していく。

つまりは、人が何か重大なことを決断する時は、けっして単純な理由ではない、いくつもいくつもの要素が複雑にからみ合っているものだというのかももしれない。

これは、私自身の弁解でもあるだろう。

私は、簡単に会社を辞めるような女ではない。仕事に能力があるのか、子供につらい思いをさせているのではないか、いろいろ思い悩むことはあったけれど、ちよつとやそつとのことで、生き方として決めてやってきたことを放り出すようなことはしない。

しかしこの時重要なことは、夫の転勤があったことなのだ。いくつも要因が重なったとはいえ、基本的に、転勤がなければ私は退職せずにすんだのである。転勤は、私の職業観を問い、家庭観を問うものであり、何故女だけがこうした悩みにつき当たらねばならぬのかとする問い以前に、現実をどう処理するか、目の前の問題であったのだ。私を選択と決断の岐路に立たせたものは、まさしく転勤であった。

* * *

夫に転勤の内示が出たのは、夫婦そろって勤続十三年めになろうとしていた三月のことであった。夫は大学院卒、私は学部卒で、勤続年数は同じだった。二人ともに、組織の中堅になりかかっている頃だった。

その年の二月末、私は十二人ばかりのセクシヨンの室長辞令を受けている。ポストはあきらめていたものだったから驚きと同時に、「やっていけるだろうか」と不安もまた大きかった。女に限らず男だって登用の辞令を受けた時は、不安と恐ろしさを抱くものではないだろうか。

「私に出来るかしら、どうしたらいいだろう」

しかしこの時、まだ転勤を予想もしていなかった夫は、こう言って私を励ましたのである。

「そりゃ誰だって初めから自信のある奴はいないさ。やってみればいいじゃないか。仕事はやっていくうちに自信が出てくるものだよ」

言われてみればその通りだ。私の周囲にも女の室長で大丈夫か、女が出れば、とれる仕事もとれな

くなるのではないかとする危惧の目はあったし、何よりもその思いを抱いたのはこの私である。私は不安を押えて言った。

「そうねえ、ポストについている男の人たちは、みんなこうした思いを抱いて働いているのかもしれないわね。女も男も同じなんだわ」

「男社会って言うけれど、男だってそうそう馬鹿じゃないよ。相手が仕事出来るって思えば、女だ男だに関係なく仕事をまかせてくるものだよ」

私は調査機関に勤め、主として市場調査の営業企画をやっていた。折衝をし、見積書を作成し、調査票を作成する。実査と統計処理は他セクションでやって、データがあがったあとの分析と報告書作りを行なう。小さな会社であったから他セクションとの分業は必ずしもこのような流れではなく、時には全プロセスを一人でやることもあったし、フィールド・ワークの応援に駆り出されることもあったが、とにかく主たる業務は営業によって調査を受注してくることであり、管理職ともなれば、営業の比率はぐんと強くなる。女にまかせて大丈夫なのか、折衝相手の目にそれを感じることはいくたびかあったし、社内的にも女のとってくる仕事は小さいとする目のあることも確かだった。実際には大きな仕事小さな仕事雑多だったのだが……。ただ、私はどんな小さな仕事でもいとわずに、引き受けたことは確かだ。大きなものも小さなものも、かかる労力はあまり変わらないから、男はどうしても大きな仕事をやりたがる。しかし、小さな仕事を続けていくことも大切なことなのだ。だから私は、いつも忙しかった。

一方夫は、建設会社の土木設計技師。二人はまったく畑の違う仕事であった。ところが、その夫に、札幌支社転勤の内示があったのは、なんと私の辞令が出た一週間後であったのだ。勤続十二、三年めの頃というのは、働く人間がそれぞれに転機を迎えるということであろうか。

「もしかしたら、札幌に転勤になるかもしれないよ。今度は長くなるらしい」
夕飯のあと片付けをしている私の背に向かって夫は言った。

「ええっ、まさか」

なぜ私は「まさか」などと言ったのだろう。後々まで私はこの「まさか」のひとことにこだわったのだが、実際のところ転勤はあり得ない話ではなかったのである。

それまでも、期間が一、二年の小さな転勤を三回経験している。その時は、本社設計部に籍を置いたままの、いわば出向のようなもの、当然のこととして単身赴任をしてきていた。

「今度も単身赴任で行くんでしょう？」

「さあ……。早くて五年だというし、今度は札幌支社に籍が移るんだ」

「そんな……」

私たち二人はもともとが北海道の人間である。二人で就職のために上京してきた、いわば夫婦そろっての出稼ぎのようなものであった。上京当時は二人の両親もまだ北海道に居り、私としては東京就職が不満でならなかった。東京の暮らしに馴染めず、かつ私が大学四年のときに生まれた長女を私の実家に預けて上京してきていたこともあって、最初の一、二年の頃は、なんとかして札幌支店勤務にし